# 一茶百話

へ5
1142

8 書上多く

門 利
號
卷

重刊

# 一茶百話

斯文樓藏板

## 一茶百話　序

天明末之今歳從卯月之始我斯文樓庫
換于師室世有為畢婆羅窟止乎或日一束
之反故之中尓見有此草稿了則向日夜之
客應例不倦集談笑庫止聞書也亦為
初心述無注共無評共有之頌賛之訳
文り吾見之憶之歴尓彼深正信讃談
祖々之據證而為貴不雜一字應学力之

自己等閒一向宗門勸化庫誠尽祖意之闕
底矣者亦何欲添此上矣耶急梓行而無
遠近與及同志去則謂為道建立之一助
学則師者例不許維者是孰之年尓哉
不覺我副唯任老情之浮而如形為見
掘薑止無益之草稿從来老之涅覧
一篇之重複錯綜彼謂歷公任卿庫麼似
為忘了則令見千人而自被笑矣麼唯深納
置而實此有觸傳授與給髣髴矣麼　可

面通了與只笑被渡止乎傍為居合始於
画中園是此侭為於獨之獲耶與難辞
唔合而之催促更不及一座之衆議崩後之
君子之實躰而既定梓行之沙汰侍矣来

斯文主人

# 三頓傳



## 三頓賛口義

玄武坊

世傳醋吸之圖者塩梅儒釈老之道而
酸芸耳芸苦共所謂人之好不好與乎然
犀有世界謂物數奇事而飽不有甘兮不
有苦兮窺麼月夜之米飯則孚斷其飯而
誉所酸了也增而好納豆人者誉其孚
饐臭矣哉孰犀謂道之是ム矣孰犀謂道之
非矣攻乎異端斯害也已

寔ニカノ云フ目ニ見レハ砕ノ如クナルモ心ニ聞ケハ金ニ似タリトヤ三道ノ楷梯　次下

鐘タル臭テテハ唯俗談ノヲカシミナル其文句ハ虚ニシテ句格文法ハ云フモ更ナリ 語意ニ甚
深微妙ノ醍醐味有テ結語ハ論語ノ全文ノ實ナカラ爰ニ用ヒタル俳諧ノ虚実ヘヲ見ルヘシ
爰ニ此大意ハ非儒非仏ノ一門ヲカマヘテ世法ノ一宗ヲ建立セントノ企ナレハ彼ノ一向宗門ニ非僧非俗ト
ナノリナカラ今日ハ僧法僧形ナルカ如ク儒ヲ表トシテ人法ヲ先ニスヘキ起語ナレハナリ カノ念仏
宗ニハ聖道門ヲ難行トシテ上様ニユツリ浄土門ヲ易行トシテ下品ヲ正機トセラレタルニ俳諧ハ
其中品ヲ正様トシテ世間ノ人和ヲアツカヘハ異端ヲ攻ルハ害也已ノ聖語ヲ證拠トセリサレハ諸宗
ノ祖タルニ何レヲイツレト云ヘキ事ハ人ノ大悲ニ勝モ者モアラサレトモ中ニモ念仏題目ノ如キニ至テハ老
婆深切ニ催サレテ愚智無智下根寂者ノ尼モ入道モ道ト云フ事ヲ弁ヘサレトモ其念仏モ
題目モ互ニ異端ト思フカ如キノ偏執ヨリ喧嘩口論ノ訴トナレハ堅ク宗論ヲ禁セラレテ
僧俗氏ニ人カヽレキ人ニハナキ事也テシテ何ノ何某トテ公表仕官ノ上ヘニハカヽツテ口ヘモ出サレヌ
事ナレハ爰ニ世法ノ急用ナルヲ知ルヘク爰ニ儒仏ヲ和ラケテト云ヘル舛ノ一字ヲモ信セサ
ランヤ 抑醋吸ノ発端ヨリ世已ニ至リテ僅ニ百余六字ナレトモ爰ニ一双ノ眼力ヲ得ル人ハ
三道ノ密旨ヲ今日ノ俳諧ニ知ルヘシ爾有則カノ念仏ノ百万ニシテ六百万字ノ
功徳ニモサリカウナ論ノ二万八千六百四十五言モ此一章ニ含蓄スト云フヘシ 抑謂

太極之道者 大虚者太極也本無極故曰太虚 太虚寂ヲ廓落テ甚タ化スヲ 神家ノ日本紀西家ノ天真論ニモ筆ヲ立ルノ始ト見エタリ 従本

一ハ助之道也 其ハ 何謂道乎 心無内外碍則無住不通 樂樂而安 安不流不滞 猶性相如如常住不遷名之曰道 止昔東郭子問荘子所
謂道悪乎在 曰在螻蟻 曰何甚下邪 曰在瓦甓 曰何其愈甚邪 曰在屎溺 東郭子不應ヽ是道ノ道タル故ヲ知ラサルカコトシ 分千車万馬

之岐 而或者 折鳴念佛之鉦 或者 横倒
参禅之棒 究此所示者 説
説虚 実 儒家 結五常之垣 則佛門張五戒
之綱 而互断往来之道 則 此ユヘニ儒者ハ佛家ノ奥ヲテハ見ス 仏者ハ儒門ノ内ヘハ入ラスシテ一宗キリノ
法義ヲサヘ生涯カヽリテモ眼ノ明ク人ハ万ニ一ツモアルカ
ナシノ推量同士互ニ手前勝手ノ理屈ヲ云フノミ 老子者 説 手振千
貫 而 割 斗 折 衡 争 家 天地 而 鎚 磨 不
卸 将 擴 栽 好之道 與 所 道之可道者不有常道 名之可名者不有常名 無名者天地之始 有名者万物之
母ニミツコノ見様ハ釈迦モ孔子モ同シ事ナルハ一筆ニタヽヘシ 醋ノ如シサルヲ人ニサトサントスルニ至リテ
口ニ説ク所ニ地アリ節アリ曲アリテ曲ハ例ノ名人業ナレハ人ニナラツテ得ヘキニアラヌヲ臭似

ソコナヘハ学ハズニハヨトレリトソ手ハ生得学文輝ニテ何レヲ何レト云フ中ニモワキテ老子ヲ與カ
サレハコヽニ論セスサテ先ツ宗ヲ定テテハ道ノ大本ヲアケテ世法ノ一宗ヲ建立スヘキ序文ト見ルヘシ

率哉謂俳諧之道者汲合之家之意味而
塩梅和漢之風雅了則 詩ハ志也和哥ノ言葉モ心ヲ道オ要道ナレハ文ハ貫道ノ器也ニテソノ文ハ則言語
ナリ文ハ華也カサリ也
礼法トモ則文華ナリ 人法者従孔子之諷諫居心法者
傳釈子之虚霊些文法者效荘子之形容歴
此三則三頓ノ三人ニシテ世情ノ人和ハ五倫ノ常法ヲ説ニ談笑ノ仁ヲ用ヒ諷諫ハ例ノ内秘
ナリ虚実ヲアツカフ 敏捷ノ智ヲ中トレ文章ノ自在ヲ頓挫ノ勇ト見ルヘシ
然則非儒兮非佛兮不構老荘楊墨之一城
兮假令謂釈迦孔子之御経共ハ 御経ノ二字ニシキツテ俗訣ノヲカシミヲ知ヘシ
是スナハチ文章ノ勇ニシテ
一門建立ノ外現ナリ 知言語之用與無用了則其ハ虚



磨合點兮其實磨合點兮何条可羨暗許
之黒豆臭矣 是コノ敏捷ノ変化自在ヲ
ステ老後ノ樂ノ字ヲ知レ 従翠簾而嗜人柄
磨欲毀而遊者俳諧之談笑也 実ニ明カニ見ヘタリ談
笑トハ発句附合ノ交挺
ノ事ノミト覚タルハヒカコトカノ盤珪和尚ノ法語ニモ吾ハ佛語ヲモ説カス只人ノ身ノ
ウヘノ批判テスムコトナリ其スムコトニムツカシク経ヲヒキ録ヲヒクハ下手ナコトナリト云ヽ
一切ノ佛経ト云ヒ儒法ト云ヒ畢竟ハ世ノ人ノ批判ウワサナリ 悪ヲ云テ悪ク沙汰シ
善ヲアケテヨク沙汰シテ人ノ心ニウツサントシタルモノナリ 此沙カ十論ノ勧善懲悪ノ
大切ナリ 乍去棄人之三味線而浮芳野山之花
了蘇雉波浦之风而 彼ノ涜張笠ノ洒落人トナリ又ハ儒仏ノ大道ヲモ
祖説ニ例ノ耳学文ヨリ佛モ知タフリ儒モ
知タフリニテハ覚束ナシ古人ノ跡ヲ追ヒテ馬前馬後ノ僕トナルヘカラスノ
大実語ナリソコヲ例ノ談笑ノヲカシミニ書ナセル祖意ニハ無度驚クヘシ 抱頤蔑
兮頓笑兮頓乎月乎雪也則立合點人形之

憂名而成果学文之日備也矣 実モ右ノ実教ノ同意ナカラ例ノ俳諧ノ功者ニシテ俳諧ノ心ヲ會セサルヲハチシメラレテ机上ニ筆ヲ持ナカラ思ハス汗顏ヲ拭フ事ナリ 二子能察我言之虚実而 二子ハ則談笑ノ仁者ト文章ノ勇者ヲサシテ机ニウツムキナカラノ形容ナリ 学而思思而学 ナント俳諧ノテニヲハ附合ノ変化等ニカクハカリ實語アランヤ 知今日之用與無用則宛賢

悖豊干之饒舌而看破獅子庵之遺稿矣 此遺稿トハスヘテ葛ノ松原汝下古今抄ニ至ニヘテ一代著述ノ字句ヲ見尽ストモ祖ノ本情ヲ見サランニハ徒然艸二十五抄ノ拵着ナルヘキ事必セリ 誠ニ表ハ俳諧ニシテ禅様ノ活機ミ地ナル事又ヲ九拜スヘシ 爾者則所謂之人行則必有我師為合點文殊之智慧乎 論語ハ論談ナレハ俗談平語ノ談笑訊諫モ異名同意ナルヲ見ルヘク又雅儒俗仏ヲトリアハセシ筆頭ノ自在ヲ感仰スヘシ 艸圖者頓儒佛老之内證而 之聖ノ塩梅ヲ

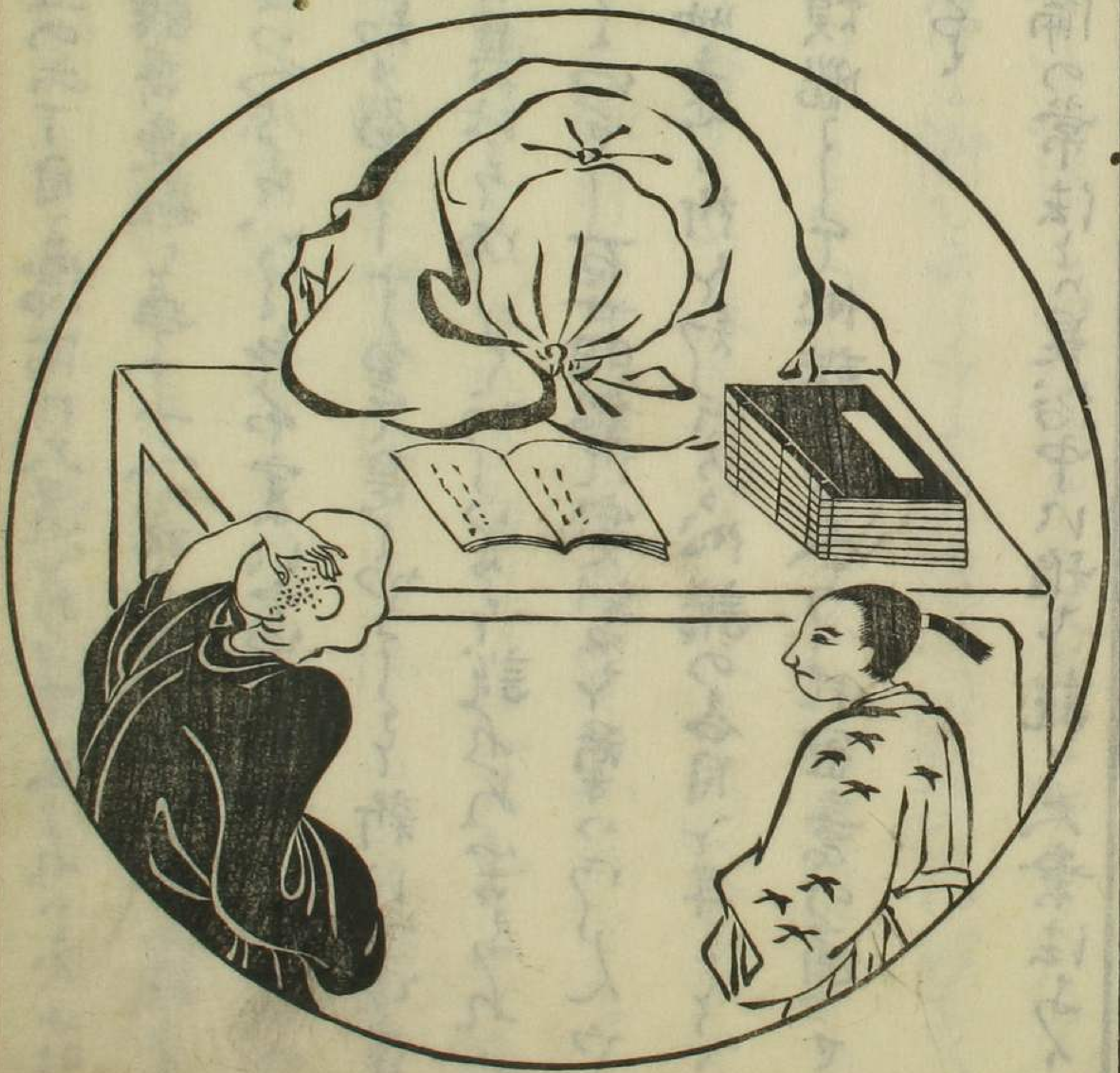
感味シタル惣結語從頭至尾一貫寀来直截根源ヲ不描尋枝葉ヲ及四百九十九言更ニ一ツ両舌ナク此頌ノ一字ヲ決ス実ニヨク頌ノ字ニ證解ノ二字ノ意ヲ顯ハセルハ例ノ筆ヲ先ニセシ俳諧ノ文章ヲ仰クヘシ但タヽ低頭ノ時ハ変古切ニテ音府ナルヲ他吊切音頌ナル時俯首而聽トイヘル学文ノ巨細ヲモ深ク感セサランヤ然レハ此圖ノ外現ハ東蓮白ノ三相ニシテ彼ノ三尊ノ弥陀ヲ立ルニ慈悲ヲ観音トシ智恵ヲ勢至トシテ三尊一弥陀ノ形容也亦二子ヨク我言ノ虚実ヲ察セハト外相ハ寒山十得ノ趣也実ニ三老ノ係ヲ弁セハ俳諧ノ三徳中ヲ智トシ左ヲ仁トシ右ヲ勇トシテ例ノ仁勇ヲ智ニアツカハセ九ニ云フ儒仏ヲトリアハセシ例ノ内秘ヲイハヽ左右ノ二子ノミ俯首シテ聽ノ三ハアラス是則如是我聞ノ三人ナカラ頌ク時何ヲ頌キタラント見ルヘシ其ハ云フ之道ノ内證ナラスヤ 可謂俳諧一宗之判物矣 判事物ノチラシハ例ノ知ルモノニハ教ヘ知ラサル者トハ掟フ俳諧ノ寛仁ヲ見ルヘシスヘテ世法ノ急務世法ノ急用トハツコ実ニ云捨テ徒然艸ノ讃ニ至リ 始テ世法ノ一宗ヲ建立トアラスハセリ イハヽ詩哥モ其合ト見ヘテ貴キ事将相ヲカ子富ル事又金銭アテリ有トモ皆イテタ土中ニクサラス右先タワテ世上ニホロフタてタて後世ニ知ラルヘキモノハ和哥ノ人ノミト云ヽ 口傳 亦此贊ニ人法ハ孔子ノ訊諭ニシタカヒモホツノモ事也詩三百一言ヲ以思無邪ニモ赤負觀群怨ニモ亙考アルヘシ此詩哥ニイサヽカ語意ノ違フハ例ノ国曲ノミ道トスル術ニ至テハ無ニ亦無ニナリ サレハ人ノ世ニ在ル事又無事ナル事又アタハス喜怒オシウツリ哀楽相変ストモ貼今集ニ見ヘタリ コレ貪愛成五縕假合得為身是ヲ知ル時ハ俳諧ノ一宗トモ云フ詞モ其ハ心苦ノ事又ト合點ユクヘシ

獅子老人三題圖之賛

あぬむくも
うつむくもさひし
ゆりれな







然れば古今抄五の六丁目に儒佛は大道をあげて志られバ老荘
楊墨の乃至も詩哥連歌を学ぶ人も碁書画を好む族とも
万法一例の始めにかゝはつて、いづれや実に家と呼びつる格式の
次第あることを知るべし、すでに是をかぎりとて新に一道建
立るは大造なれば其法を伸べくいふべからずと説れぬ筈なれば
志るものゝ知るに伝せし百世明鑑は實録を筆にゆるんや
まして我宗は世違る所を知らざらば俳諧の名目を耳にとゞ
めし習氣は煩悩にて俳諧は古人なれど密意の通ぜ
ざるもよねなり
世間の人和は五倫の常法より是俗中に雅を説く大衆法なり

るゆゑ世法の急務とも世法に一宗建立とも天下の一助ともいふべく
其道徳も儒佛に衡をならぶるゆゑ俳諧の内秘なり
畢竟附合の法あるゆゑハ人と人との交りは和同同和のちがひ
より小人となり君子となる賢愚得失はさらに一歩千里
なることを習ひ得て深り奇なる家より文質のちがひを立て
我門にては雅俗ともにわかるべし　和合の元を言語
なり急緩尊卑剛柔博学儒といひ佛といひ言語より
教ざる法なし此言語に尽くとはなるに變化ある理
あることも家を何のため何の為に自己に會得すべき
ことて十論は大意なるゆゑ總結語に互見あるべし

凡天地人間に貴賤ら差別の要はる根元ハ何そ男女と
水火とあり是此の本情不同なるゆゑに然不同なる
ものを和しおさむる者は世をもつて日用の生命を持ん
るとき五倫いづれも和せざれバ道おさまりがたしされども
君臣父子兄弟朋友よりもちの根本の生質不同
あるも男女あり是れハ家の要根本となるものゆへ
和する男女をあけて余の四倫をすつる法を先とす
此ゆゑに代々の撰集にも四季の次に恋の部立あり
然るに柳生流の元祖なりしも剣術の奥儀をいふて
此語をあせり然れども和をもつて行ひがたきなれ

孔子も女子と小人とハ養ひがたしと申し此和ハ實に作りがたき上
虚実自在ありてこそ一世を百韻ならずとも巻をなさず
天地を動し鬼神を感せしむる議論に及ひなし然るを
我門の耳学の人ハ和とハ茶にうちらんげ給ふに心やすくするに
なるを和ときゝ給へ談笑の笑の字に實をやとめて笑ひくずし
るをと見違ふる人もあるましきなれバ一碗の茶話に
二三子に耳語して機縁熟せざる人にハ伝へがたし必とし
閑として人をせむべからず冷煖自知れ用捨すべき
るべし
然し和ハさまざまにわかれて一婦一妾あるに一人二人と心向ひ

の和なれバなりかれも行ハるゝ事なれバ亦武士ハ文情にて用ひがたし
いそがしく百万の士卒を和する用にハ立ずと暴平仲よく人と交る
久しくて敬すと孔子も誉られんとや世用の人和なくて能く合点
あらせてがくもなく近きなるゆへ右の如く男女と水火ハ今日の急務
にして和せざれバ一日の用をなしがたしとハ誰も合點なる事なし
其不同なる水火をひとつに混ぜバ飯にも茶にもなるまじ其不同なる
男女をひとつに混ぜバ人法ハたゝざれバなり火のうへに水をのせて生々を
養ふ日用をなさしむるハ鍋釜の器にて是を用ひくらぶれバ実ならざれバ
補ひて虚実の自在より天のなすとなさしむ人のありさまにて男女ハ
間にハ禮節ハ別をつくす鍋釜を用ゆる様加減ハ礼節のする



と合點あるべし此塩梅を儒にも佛にも様々に説けども耳遠く
しくがてんのゆかずしてがてんなりがたく合點ありてもがてんハ道に
行ひがたし実にして其禮節に虚実の虚実となす事と説く
もの始く我祖の教を知る事し虚に居て実に於ても
虚に居て実をなすことなくもあり一切万物の本源ハ空寂を性
とし動用を相となし実に世性相躰用の二義虚実を説くに
捷径なり右をよく〳〵用ゆ能く会得解あるべし一切万物の
本源性よりなれバ心にも詞にも及びがたく知るべし耳目にも心にも
きこえざる相も世相ハ常に変化せざる事なし実にしてまた
心に聞こえざるハ実にあらずしてハ耳目に知れざるハ実を

行なるに其虚の中にも性相ありて其実の中にも性相ある故に
虚實の虚実とハいつれも早く合點せんと
ならハ道ハはなれて今日の変化を志るべしまづ見る
所ハ人間鳥獣草木に生住異滅の四相あるにハ眼前
なれば木を植ゑおなじく子をもとめて見るに朝と晩と
昨日と今日とかはりゆくありさまも見えさらに変化の事おほし
一息の間もかはりゆく事なし是によりて変化の理性なり
續五論に曰俳諧の敏捷なるハ物の本情を知るべし天地万物艸木
鳥獣乃至道具表也中にも其の本情を備へたる人間に
かはる所なしとして俳諧師ハ萬ゞ道具表也の本情にあて

都鄙貴賤に次第あるの事を知る所士農工商の階級に
自己の心意にあらざる事を知るハ小身の人は死に大名に
低頭するのみなり小給の足軽中間にも金持大富の百姓町人の
横平にあらずとも木綿頭巾の縮緬の褌をいやしむばかり
さる天理のよき配分あるを知るべしさすれバ古今十方に流れてかはる
一座の附合の変化をとくるが如し是を経文にハ天眼通を得れバ
大千世界をみな掌上の菴摩菓を見るが如しと也形容
せりさて其見る所實にいはれ證文あり唐東夷傳に曰
東海日本倭奴国去京師一萬四千里其俗多女少男小嶋五十
余皆自名国而臣附之なりとて知る所住吉より日高見の国

ども君子国ともいふハ人の上品なれバ也天竺を月し震旦を星とし
日本を日とせり今天照皇太神宮ハ則日神の御影を崇めるも
しや人の五臓よハ心の勝し天地の間の五不思議の中に多少力
不思議といへるありて草木鳥獣万支万物人間と相応するも
女多男少きといはれいふし事よくありとて唐土の人日本の人別ちを改め
ころなきや是ぞ此の風俗の上品下品の浮中を形容せしと見るべき
所なり今時のあさ下品の女ら男の業をなし食物も衣類も
男まかりもて上品の男らおしき業をもなさす衣類食物髪
形の心ばへも女にひとし実に日本の本情を知りて注連縄
まい直清質の三義をまもりて神教を尊むへし志るに



右のふ治世の病文質にかゝりて人王四十代天武の御宇白鳳
のはじめ大津皇子始て諸越の詩をつくりしより風俗媚を専ら
として直質ハ国教に遠ひきて来る事百八十有余年にいたる
を古風にかへさんと和歌を中興せしもの古今集之其古今此集に
誹諧の名ありて文甚心を得ずして過る事あり山崎宗鑑
法師誹諧ハ一体といひ出てより名のミにて拾ひし過る事二百
廿年になりて芭蕉翁に発起して今洲我門ハ道あり此
ゆへに東華坊家期の著述を古今ねとえ之も実ハ二代著述の
意にふ古今集の和哥を中興せしに比して見るへし　キンをコンとい
例の時宜を知るもの例の順く得由なきよて延喜式をよりて

貞享式といふ書に見えたり人情の文質かろくしてあるゆへハいふとし
いつも甚よろしからず是に依てハ凉しきを好む心となり冬ニおいてハ暖を好む
心よろしく貧富患難境に對して自性をうしなふなかれ情
なれハ我去りて花となり宮となり雲となりて廿一代集の作者
とも釈迦一代経の説法ともいはゞおのれしる印と時中に古人
なれの密意をしりやすくして俳道に建立され翁の意にかなひしと
以心傳心しく東花坊一代の著述に東花坊翁へ相見ハ元禄三
庚午三月三日と二面の時悉く得し其の翁ら佛頂和尚の法脈
開眼人と東花坊も盤珪和尚の法弟なれハ説似一物即不中の
機縁熟して開発せしものなれハ元禄三年同じく廿八歳にして



奥羽の行脚の時一代の秘訣を葛の松原と評してまづ誹標を俳諧
の風と定められたり是則俳諧の自利利他に上求菩提を
求め下化衆生を薩として示されし抑ハいかんとならバかのいふ
人にハ葛の松原としいひてはその事となやまされの哥をとりて
外相ハ儒佛の威儀をそなへたりとも因縁の時ハ礫のかくし心に聞けハ
金に似たる言を一向宗門にあつめなりとして俳語も鎧塔の話
になれバ一代の著述連綿として不易なるものハ葛の松原より
はじまりるべし又此一宗をして許に深く心をとどむもれも
佛宗の諸宗のわかちまで嗜むべきの削掛の近き音の中にも我身
のうちにハ自惚ずして我家の大なる師道に邪魔するものハかの

感陽宮へ忍び入て菓子を皿一枚盗まんとするがごとし小智大愚なれ
ばまゝしらん然るを其比の古志をも年来の自原と荷ふて
正統といふのり嫡傳と称してをのれがかつて道とく信させておのれを
ほけく嫉妬を起し尾の越人が不猫蛇のことなど難破四方に蜂起
せしが古文真寳の師の説をとくやまと讀ませらやと七十年の
今しあるき押しすくり不便のことゆれば其述懐が寳永
八の孫弟子の記より正徳末の文句なども其余も諸書に散在せり
誠に一門建立の積累が感して感とる事ある所あるにれや
如くおほくに述ることさらにいはゝ九牛が一毛とあるべし
さて右の如く一相見に即啄同時の機縁熟しが即是以心



の一言を得て万巻をも説く事なす龍の一滴を得て天下に雨ふらすを
おもく俳諧に古人なしの密意が見聞せられよいろきずしかの法然
上人に三百八十人の弟子ある中より親鸞一人一器の水を一器にうつして
浄土の中に真宗を建立しまつるふうしむかし南宗禅師にあり
僧同萬梅門下五百人ありて盧行者ひとり衣法をはなくうけらる
いなと師曰四百九十九人が佛法を解せるがゆゑに盧行者一人を
仏法を解せざるがゆゑとし実に正等我に同く古翁の門人
千人にあまりしとして謂らく去来許六其角嵐雪の如きは古志を
ちかひて取今の東華坊より以心傳心といひて古翁の門人
九百九十九人が俳諧をする事く東花坊一人が俳諧をせさる

ゆへに言ん是等は僅に一字の信は万巻の書よりも得ることよ
所あれはなり此ゆへに此信を得る人は千巻も一字のうちにあらも
一理万通の眼を得て七十年の世を経ても芭蕉蓮二と
一座に於けるすがたなるへし
翁の心をはかる人は儒佛の間に一路をまうけて虚実の名目の
廣大なるに空色の同體異名なる俳諧には異名同體
なるをしるへし中にて世代の盛衰にも随ふても又は天下の
一助にも着るとすくれたる法語なるぞやされはこそ文ある者は
儒佛に衡をあらはせは衡も秤の権にしてすなはち儒
仏の大ろくはみな一分一厘をもつらぬかす甚だ数は



かのはれくの積に佛家は五千余巻儒門の五万余言をとりても
もとつ所にいたりて難有とやまうけて曰儒佛の万巻もいまだ說さん
ことに儒仏の万巻を悉く見るとせしやと陳じ曰何を万巻とやいふそも
用ひれは儒にいひ佛にいひ心の一字より善悪の二字に説ひらけて
勧善懲悪の四字ともなり眼ともして万巻の表をもあらはされとも
心をもて一字の裏をもつるときかくのごとし是則禅に不立文字
の正法眼蔵ともいふへきなりしかあるを道の内證ともつるもの
俳諧の智にいたらさるなく道にも師とも尊むへき所あるなり
それ發句附合も何ぞし微細の傳授口訣をゆるされいとて
詩も連歌の家にもあれは茶の湯蹴鞠の人にもありて親とよ

すべく道といひがたしもとつとも其藝能の内のことにして
いはむや儒仏の大道にならぶべきなさ八されば孔門の七十二子に
六藝に達人と聞えしは其六藝に師道と呼ばれて孔子に
ありて三年の喪を服せし師法をすてもせず即ちに三事
仕りて父を身とせし君を身とやしなひ師を心と尽く
ゆへに君父師の通要より天下の大禮をなすことなく
師道をなし得れば善人多く善人多きときは朝廷正しく
朝廷正しく天下平なりと説けり
家に此の俳諧の教とする所はまことに諷諫と内秘
として談笑を外現となさし我国の人に我国の詞を



以て上下にわかちなくなさて中品以下に正風とするも一分の
金のつまにりしく上下万民東西八方縦横自在に通達すれば
なとくあるをさんしてあり（道ハ通達ノ義也トいへし）此故にみな句の附合のみは甚名
目のあるに偽かせて則人を導く正風道のあ現る事（正風トいふ一風アリト思フハ則スグニ邪風ナリ）
人は身口意の三業によって身業の禮をなすと教ゆるあれは意業
を先と説く法もあり時に我が俳諧においては口業をもつて正風
を得させしむ下卑にならでさてめでたきに高ぶらず媚といやしき
の四病を治して心におなじく身におなじきをむねとすれば附合の
法をたてもちて世用に人和の徳ありしていはば竹刀木刀のごとし

かく骨折て習則他と合して之業正風なる時は六祖の言る
平等性智心にも病なしといへば何ぞ法華の是好良薬をも
待ん用きやとなり
俳諧は武士の餘力ある学ぶべき道なりといふはまことに俳諧の
至る所は中品以下は口傳とおほせしは例の附宜にして意にて
以下の二字は眼とすべしむやみなる事なし畢竟人道の中庸と
於る事なきを人道の事相とすべし中は士也其故は
大夫以上公家殿上の上までに及ばず農工商の下にもおよばずて
世中とまで於る事なし依て上へも下へも通達自在なる人にて
一切中を以て上下の用を達するは今日の世体にかなへり是は



更に奉るに及ばずとされば世故に言語の風も歌連歌よりは
清らかなる所あるは俳諧の深き亦其士を中とする事ならむと然れば
漢にては諸侯大夫士しかあるに士農工商とも呼んで宜し
学而居位士となりて冠婚葬祭の法をも守るは是士にして
はあって上へ次中を説くるもまた人性の性理をいふ時は
学ぶ時は庶人といへども今日人の為に訳を弁へざるなく
富貴の人とても庶人といへども又ある事ぞ濡門には小人
といひ佛家には凡人といへり是も玉の如きも石にもまた
生まれし世故にまた十と一の會意にて終りをまち合点して
始を後にしてなすとかの孟子辨物にも初念の心といへり

金一百両のたとへあり又必竟士とハ凡情を超たる之佛門にては
時に菩地之薩に於ましても士を讃しきれいるを観音地蔵の
如きを摩訶薩と大士と書くを見るに之し然れハ俳諧れ
道に士道としるもあやまりなしと今日の稼に
貧富格禄の不同なりとも心を俳諧にあそばせは人道の
中品にして士道なりさて其中道に内秘ありて家業あり
藝術ありても理ありて其内心の正風なる人何ぞ家業れ
邪をなさんや藝能に邪を好むや家業に正中をまもる
藝能に正中を好む人なんぞ内心に邪をおこさんやされ
言行に心の近かよるる言行論にも説くが如し禮式にいは




法格といふことあり見る所なれハ学問にて書物をけがすハ
他の糞れを以て息をせんとするに不立文字の宗風
まへ学ぶもさることなし然れハ僧俗四民のうへにても鐘を
鋳て読刑の主とも捨るが如く又とて仕舞するもあり
猶ハ生れ付の肉糞の如く面々それぐ此身体の中の
自然にあらはるゝ心の下卑なれハ利欲にまよひ
心にぬかりあれハ名聞にまよひ佛法をけがす人ハ
出家の中にありて座禅にも媚び儒学のうへの唐人の本を讀
皆これをしれハ平生をうしなひ病人にして隠れとも猶ほ
異るとて出家の衣を忍辱無着不殺生の形容にして

身に戒定慧の法を志ざせしハ始て天竺なる時に辛息入無事
真実報恩謝と唱へて不敬王者不拝父母とうたはれハ出世間
のはしとして今日の人とハ別なるなり武士も人道の正中にして
世法の規模とするものなれハ二刀を自殺他殺を表して其の
衣服の始ハまづ弁渉幼志令脩男之事とこゝろざして虚病
に隠居をもつらく身に八徳をやつしつゝ紙衣を着し二字に深い
なる大小を忘れて頭陀袋に隠笠をもて汚名を子孫に
のこりてもその心にかゝはるハ筆法未練ハ是非もなし
されど風雅の名に忘せられて吾祖ハ道ふて迷惑なるべし
家に俳諧の世法より其の武士出家の姿情を論さば出家の



三衣も武士の上下も更に家業の礼服にして行れつに
座禅種りあれバ手つに割膝張肘あつて仏家の持鉢も
武門の二食も喰ずてはたらして孫つ話んに世間出世間共
ちらしありねハよつ急用も世法にかけて吾祖の教へと
尊むべし

風雅ノ寂トイヘハ貧乏ノ洒落ヲ本拠ト思ヒ禄ニハナレシ世ニ
捨ラレシモ本意トシテ恥トセス是全ク金鍮ノトリ違ナリ
昔賢者ノ隠道世ニ多カリシハ戦国ノ故ナリ亦スヘテ官ヲ辞ノ気促ニアラワフナト
唐ニハ恥トセサル故アルコヲ知ヘシ晋王沉カ釈時論ニ衰龍出於福禍帰相起於匹夫ト
イヘリ日本ハ開闢以来君臣ノ道歴々トシテ異国ノ世法トハ雲泥ノ違アリ今万姓宗家
ヲ云フ皇別神別蛮別ノ三ヲ出ズ只隠者ノ書捨シ古文故ニ親ヲ尊ハレテワノ取違ノ
害ノ軽キ分カ朝寐夜擬ヲ是ト思ヒ家ノ道ノ立身ヲ俗ナリトイヤシミ亦ワノ害ノ大ナルハ
家禄ヲステ身帯ヲ投ヤリテ不喰貧乏ヲ寂上下思フ心ニ好ク思ヘシ是ハ風雅ヲ信スルニ似テ
風雅ヲ誹ルニモ劣レリ世ニアル佛法サヘ出家ヨリハ俗家ノ道ノ法ナルニシテ風雅ハ憶万
ノ中ニ五三人ナル隠者ノ道ナラハサリトハセテキ古又昼寐ニモ溥変ニモ劣タルイタヅラコト
ナルヘシ仏法モ風雅モ形ニモトメテスルモノ人ノ道ニハアラズ心ニ信メ其本徳ヲ得サセシカ為ナリ
却万物本源ハ寂キカ体ナリ寂ハ静ノ古字ナリ人モ若キ心ハ静ナラス四序モ春夏ハ

シツカナラス藝能モ下手ノ間ハ静ナラス碁将棊モ俳諧モ向フトメツタニイツカレク騒カシキ
心ニテル間ハ上手ニアラス国家ノ法モ治レハ静ナリ年ゝ月ゝ新法アラハ心静ナルテシタトヘハ
行燈一ツ置トテモ其ハ毎夜在ル所ノ定リタルハ静ナリ横竪ニ置タルハ騒カレサヒシゝハ
風雅ノ体其体ヲ心トセハ何ゾ思邪アランヤ仏法世ニサカンナレ氏釈迦ノ如ク悉ク出家セヨ
トニ云フニアラス、てシテ俳諧ノ世法タルヤ
芭蕉ノ境界ヲ真似ルニヨヨフヘキヤ

けふ老後をたのしむの楽の字をもつて儒佛に媒の大道と
するべきなり 佛ニ西方ヲ説クモノハ発心修行般若ハ老後荘ノ次第也則四季
ニハ秋トシ人ニハ老後トス實ニ身ニ苦悩ナキヲ安トシ心ニ憂患
ナキヲ楽トストス云て儒ニハ知ル之者不如好ム之者ニ好之者不如楽之者ニ然るにもし
トシテ彼ノ顔回カ楽ヲシリ朋遠方ヨリノ来レヨモ勘破スヘし
十論とよし古今都をみるも多才に経るも博覧をも実るも
宗に世道ありあんと云てもし信仰想ふ人もそれ
が宗旨に東ふと云て祖師をも尊ぶ二祖をいふものを
畢竟遊藝の見ありとしても全く信ずることはあるべし

それすやいつれの宗門にも尊ふ事ありて守護神といふもの
ありて神も佛も人の敬ふて威を増すハ神ふくと感応道交とて
宗にはよらし其宗を考ふれハ一宗にての祖とある人に遍蓋
相應の機運とはかりて經により論によりて厚く人の大悲に趣向
ありし佛神の果の標なるへし さるにかの日蓮のやうに一念
三千に事理の方便をもつけてより空假中の三諦と三寶稱と
南無をすすれハ又念仏の流儀にも自力他力の大同小異にも無二亦
不同の座像あり住立空中の三像あり又一光の三尊ありて其
三尊一ちなるハ阿弥陀の慈悲をもつて観音とし知恵の勢至とし
一実ハ阿弥陀一体の慈悲と智恵との姿なるべし宗々に於て祖の

まふけられし三頓の圖といふものありて老後を俳諧の安心と
未來人ハ四角て其の壁にかけて此心を會せしとなくその
賛詞の結語にそへて俳諧一宗の判物とハ例のちらしにあや
まられて古人の俳諧の正法眼藏の外現ならずと弁つらハ是れ
てもおろかなる遺弟の不信といふへし世中なくしられ積謗(?)
を報むと梅も佛の塔前に告なすて密意をいひきまて
拔舌の罪を恐れさらにいつらも全く此道あるの證明として
百世明鑑のかな懐に相應せむとおもふ自今白山下一流の信者に
おいてハ此三頓の外現ハ道の内秘を會して後ハけしてあて
同門同志といふへし中ハ東華老人白ハ左蓮二房同しく右ハ

白狂三歸戒をとりしハ三諦にふかしハ三界一の要相なるとて
右三箇字の通格なりし教ハ維摩の説相によりつる所あれハなるを
季弁おゝ曰敏捷の要々を俳諧の智とし謙譲の和を俳諧の仁とし
文章の和(?)を俳諧の勇とすと則此あまく三頓ハ中ら
智あり左ハ仁あり右ハ勇也此智仁勇れ三德を以て一門
建立の大なるをもし而て古今よりの序(?)とつれ天なる此國ま
先りおいて岩戸の鏡の面白に神も諾まひてまひふハ
俳諧の二字のもと朽さしむとし捻(?)されなりしへつふら恐れふきを
以られとも我も三種の神器とうちて神璽をにとし寶鉤を
書し内侍所と智にはして必竟ハ世をおさむるの教なる

し害にも例の俳諧よりつゞく智と鏡とをくらべていはゞと
みるべしすべて鏡ハ人とみるをうつすや己とみるをうつすや何に
人とみるの用ハいさゝか違ハれハ智ハとかれとみるの用なくとも
光をすへしされと害にも物怪を敏捷のとり違あれハ違ひハ
やつし芥子ほどの事にて其害ハ須弥山のおほきくなるもあれハ
ゆゑに油断あるべからず但智によりけりにて曰利くハ物怪の
勇は世の中に智を以て勇をあやまれハ仁者に勇ありて
勇者に仁なきの違ひあり害に其智の妙用といふべし
智常よく僧六祖へ参りて曰我白峯山の大通和尚に随身
して狐疑いまだ決せざる事あり願くハ師の慈悲を蒙りて



安心せんと師の曰大通の言ありしハいかむ僧峯せしに五日よむと僧曰
某本性ハいかむと問時曰汝見虚空有ヤ相貌否ヤ對曰有何
相貌大通曰汝之本性猶ニ虚空ノ了ニ無ニ一物可レ見是ヲ名ニ正見ト
大師曰法のみるべきことなきにあやまりて無見と存す我偈をさず
けんとて曰自性のゐの智のあかりをもと霊光といふ汝當テ一念自ラ
知ルニ非ヲ自己霊光顕現スと云ゝ是則右にいふ鏡の事をいひして
智ともに人の心と一口にいふ中に不起一念の先きも明にして
物の事をもと佛性ともつけ明徳ともいひ国常立尊とも
中に各言同意の事にして万法自在に通達することを
真如の妙用といひてなれも又同じく言ゝ佛ハ常在説法

すれバ衆生ハ眼にハ見へざれども又神なるにハ神変
詐通形に就のまゝなきと禅家にハ形なくして一口に
吸尽し毫孔裏に入ても入りまた始より昨今の
刹那まで須臾の中にも現れ中にも量なく出入同
なき不思議自在の徳用天地万物同一体人間鳥獣木森羅
万象無始無終行ぬ智にして佛祖一如の是なるものなれとも
人慾の私より明徳をくらますと邪まに流生心をえつけて
其流をまて兵れハ是非の見きらる市に立ならびてもに
あらおもてもる人の眼前に見る往来をも見たらず静に
なりあへて知る人ハ其賑く市人のゆきかふをよしあへて



知るがかしよつてをのれが心の内にあるを悟ひうるなるをうれし
りつまりつ是非の形のあきしけに見る時ハ即正見なり
真智しきとを見性成佛とハ諸家の佛法の達徹とするなれ
禅の一句とよりて大圓鏡智とハ真空寂滅の事に行て
俳諧よハ虚に居る所ゆゑ其さびしく静なるが大般涅槃
となるなり
さて又虚に居て實にあそぶとハ虚ハ應無所住とし實ハ
而生其心と是則禅よハ六祖の悟入のはしめとなし金剛
経の文にして翁祖大師の一句建立の大元根本とするなし
よつて此三幅の圖ハ其密意の和らげるに用ひまし

中には圓に面をおもひて智の形とせしに実に一面の鑑塔を
建置て我師の本性をうつさむといへるにも勘破あるへく
左右に仁勇の形容なりしそれ智これは仁なきは勇と
差別なきを圓融といひて偏り地に十論の淵底と
其因位此果位圓満成就の圓相を説しおは顕はして
密に三昂一の儀と地はいはむにあれは経一周三に圓は七九
の定式にして磨作る京の亀鑑なりとや然れは口に言て
ても心に得ても身にいたおこなはすとも行にて例の
一尺なりし周りに二尺九すまして寸は盡ひの正風なるへし
其賛にあらむくもうつむへききひしゆりのむもとは只その

ゆりの咲並ひたるを只みて只それとしも何ともなく損なるは
例の我徂れはやしはして芭蕉門下の大職之作まて天と
ひとひうつしおて地とならへ人のよんていはましく也れ天地
寂寞百合文なりてへるは乾坤打破之時作麼生と見る
けらは是この寂寞は諸佛の本徳衆生の本心の上に本来無
一物なりて其ない心をおもひかくしもの々日々百の思想なるに
實とやまもしれは凡とさひ實をとめされは聖となる其の
思想とゆり合しにつちなる虚実のあつかひして其虚実れ
はりたらは則文之文に華之此文と以て先とすなる孔子の
骨法をなして論語の述而に倣ふる又十論の大意とも

是か為し宗とあかむべしとうつむくもの二つのもの字に眼と
やすしむる時不易の六道現然すと一經緯天地曰文道德
博聞曰文学勤好問曰文慈惠愛民曰文のをしへなり
さて是までも何とやら伯父坊のもの評議に似くさしたや
今まてのおもわくとハ相違しおれ全く祖意にかなへきやうをも
こゝに我理屈の論ありと云まふしぬ人も有るべし一式俳諧は
道といひ百世の明鑑と申して儒佛と衡をあわせる事と
誹かる俳諧の建立にして古今わたる内證ありさて
文をも現として誹言微中解紛となして二十五箇の始まりつる
俳諧に何のみちあるや俗談平話を正さむがためなりと云まじかり



五七の句法もまさに定まりけるか我國のならひなれや
世言語に有ふ病とのぞく俳諧の方便としてありとて我ら
人の趣意をもつて一言一句を正さんとせハいかなる孝子順孫も
おもんとあつまるとはいふべきに幸ひに三百余年来俳諧といふ
ものあらひありて仁平も三界も合點なされ是より教へやすく
なりを翁祖の正意我ら取なりこれ佛家にて隨類應同
のおしへ宗として世此の急用とも天下の一助ともなる意を
もつて一旦も人の世にありて人と人との交らひにさまれものも
何ばかりやもし人の老ひまつりんにも親見合ぐ物もいひそれ
茶をも出さむやさむこの火をも出さむや初生やしや智恵

法くはまづ何を教へんや如かるに世法の急務にしてせらる
人和をやはらげんとぞ其和も則文にして脩身齊家も
要法なれバ天下の一助ともいはざらんや況して武門の人々
ならバ三世の諸佛の出世するもまづ此言語れ一大事とす
重きことなり君に一言の違ひあれバ忽ち忠賞刑罰に生死
をあやまり臣に一言の違ひあれバ遠慮閉門の汚名を受て
子孫に至るまでのさはりとなるさハ其執る古語よりも竹口と
きらせんや木刀とかざすもや宗旨の文句附合の日夜に
学ぶ故と申されしや
かの西播の盤珪和尚も佛智弘濟禪師の特賜を蒙りし又



大法正眼国師の贈官ありし名智識にておはしけるが其説法の
聞書をみるに只不生といふ事ハ不滅ハいふに及ばずとて不生とばかり
のべ給ふ得ありて經文書籍の沙汰に及ばずしてたゞ人の身の上にて
批判して説むことなかれとなりかしある時の説法に自分も年
若き時より商量問答に心骨折たるが元来我國の人ハ漢語
に疎く心得がたきを不得手なる漢語をつかひて問答を
せんとするゆへ聞くものも得心しにくいゆへ
ありやとてそれ日の平語にて問ひ答ふるを向ふ者に漢語
ふれハ凡ても人に佛法を行ふ事を示されし此語ありまた
我祖の開眼一道建立の意あるをとらへし其後盤珪一流の

摘得ば我門の俳諧のごとく専ら不生をもて示す言語ハ俗談
平話なれバ其法孫諸国までの手に東武なる所中ノ郷天祥寺と
いへるあり 松浦肥州侯の菩提所なるに其ハ先き鎮心翁といへるの
石碑を見けるに我祖の鑑塔のごとくにて寸分も違ハざる其の
物好の一致なるをも感じあへりよ
我祖一代の著述なるものハ記をのべて内秘ハ内秘の中にある事と
定めハ内秘を先として外ハ記ち言語の急務をのべて教句の
論も附合の論も諸ありてもまするふまくと又ハ平話してもちひされハ
云ふまでもなくいづれも我門の漢語不得手の国にもわれく
いづれも余所の国の語に巧拙をけぢめんとせんにハ持主の

俗談平話の雅俗を弁へて如何なる不思議の妙道なりとても文
まゝならざる事しれたる未来面目をハ釈迦孔子も一分一點
違ひのなき同異に何の不足やあらんなし言行のうへ違ひ
なり地獄におとされ極楽にのぼれやうなど付けし談義の詞も
史記なりかけなる名目して宗門に說寄を我門の要語なるにハ
一向宗門に倣へる宗風と見まざるに一
すべて諸宗の説法にハ獅子座を設け威儀を荘厳するに
かの親鸞ハ愚禿と名のり我なんぞ弟子をもたんやと驕(オコ)りて
人を救ひし弟子をも持たず如来の本願を我も信じ人にも
信じさするまでなれバ同朋同行なりとて我も弟子一人と

持ちどこの下品にして自信教人信の内秘よりいへバ恍ひ
其悦ひと人もおなじかるべけれバと誹議といひて讃詠と
名つけて平座にありて横句に詠じて示しけりされバ
なしひて誹笑にハ学文をもおぼえずして初心の茶のみ咄
なし四時をなくし造化にしたがふに虚実自在の名人なれバ
口の念仏の大俗と称するよりもなほ俗中の俗よりしていさゝか
言語の雅俗より口業の病を先として去しめての道あるを
示し向上の一路といへり

一茶百話終



## 跋

老師かつていへれ論語に曰文質彬々十論に曰虚実自在と
俳諧の道もまたこれ二語と互融して心に傾くまた適当て
しけ傾く象形と三傾と図せり文質にかつ人ハ虚に在て
虚と行ひ質文にかれ人ハ実に在て実と在てなす是
いづれも世法の害にありてさらに禁じと宗れ此三傾の口義と
始として臨機応変の誹笑も其うち虚実と傾かせむと
例のくりかへし老婆深切の垂示あるをやそこと集めて

一茶百話と記するハ今ハ吾師の志衷をいひ日夜の
来客遠近の書斎なれも寝食を廃するにいたり殊より
永筆の志ときハ机下に頭をかたむくる日も再問再答の益を
請かつされハかゝる精微の教諭に記さんも又人かつて
跡なきにかされハ是をむなしくかいやり捨んもと頻に一葉の
発起をなしぬされや潤色ハ享保の丁未に二頓の積
行うて和漢文操に顕れしか其星霜積ること六十一年を
経て去し天明の丁未にいたりて此見る口義の梓れとなれるも
誠や道の冥合ともいふへきや不思議の機縁ともいはてなとか



いはさらん然れハ此挙の大造なるんれ事に校合の任しもはさ
みの趣を踏き申しより作きて隠れ潜して辞むへき業なう
もうしかるに主命によりてひ不舎観の妙下にひとりうかつきて
かくれもの伝りきるかつらくも急卒の出梓といひ師の顔貌
をもはかる時宜といひ偏に章句の錯雑ありんてよしおれ
おほく永荷に重き罪となれるなしはからされ見られ
人くれなくは此茶話の心を得まて一部の始末の微中
より祖意の内秘をうかつきおはして道に階梯の一助にも
近からんとなん

不舍観　其水

天明七丁未仲夏如意珠日

京橋治刀